

序文

2017年の『臨床眼科』増刊号は「眼科基本検査パーフェクトガイド—理論と実技のすべてがわかる」と題して検査を特集することといたしました。前回増刊号で検査を特集したのは1998年ですので、約20年ぶりになります。その間、多くの新しい検査が現れ、一部は消えていきました。また、検査機器にもいろいろな新機能や新たな解析などが搭載され変化してきています。これらの変化にキャッチアップしていくのはもちろん大きなことで、本増刊号の大きな目的の1つです。

一方、本増刊号の特徴として眼科検査における新しい変化に対応するだけでなく、「実際に検査ができる」「実際に検査を活用できる」ということを重視いたしました。眼科診療の分野で分業が進み、眼科医の多くはほとんどの検査を視能訓練士などのパラメディカルに施行してもらうことが一般的になっていると思います。視力検査や屈折検査はもちろんのこと、眼底写真撮影、蛍光眼底撮影、動的視野検査、静的視野検査、OCT、角膜形状検査、超音波検査、ERG、VEPなど、すっかりパラメディカルに依存してしまっている先生も少なからずいるのではないのでしょうか。当然、眼位検査や両眼視機能検査、調節・輻湊検査などは視能訓練士ならびに斜視・弱視の専門医に丸投げしている先生も多いでしょう。手術などの治療法と同様、検査においても紙の上の知識だけではどうしてもよくわからない部分が出てくるのは必定であり、実際に検査が施行できることは眼科診療において非常に重要なことだと思います。

本増刊号では全体を大きく2つに分け、I章では各分野の検査についての理論と実技について、それぞれ各分野の第一人者と実際に日常検査を施行している方々に執筆をお願いし、II章ではI章をベースとして疾患の診療に各検査をどのように活用していくのかについて簡潔におまとめいただいています。この中で本増刊号の最大の特徴といえる部分はI章の実技編であり、この記述に沿って実際に検査を自分で行ってみることによって検査の意義、特徴、気をつけなければならないことなどが見えてくると思います。ただし検査を施行するうえで、その原理・理論・目的がわからなければ意味がありませんので、必要に応じて理論編も参照する必要があるでしょう。このように実技と理論を並行して学ぶことによって各検査に対するより深い理解が得られると思います。このI章の内容を踏まえたうえでII章を読んでいただくと各疾患に対する対処がよくわかると思いますが、逆にII章から読み始めて適宜I章を参照するというような使い方もできると思います。II章は各分野の疾患における検査法がコンパクトにまとまっているので、外来の前に毎回30分程度ざっと目を通す習慣を身につけると臨床能力アップ間違いなしでしょう。

本増刊号はすべての眼科医および視能訓練士など眼科に関連するパラメディカルを対象にしていますが、特に眼科初期研修医や新人の視能訓練士、さらに今後専門医試験を受験する予定の専門医志向者にも役立つものと思います。もし本増刊号で足りなければ参考文献にあたったり、PubMedや医中誌で検索したり、先輩を捕まえて聞いてみたり、メーカーさんに電話して聞いてみたりすることで、より一層の理解が得られ、新たな臨床研究計画へと発展させていくことも可能でしょう。ぜひ本増刊号をご活用の上、眼科学の深い世界へ入っていただきたいと思います。

鈴木康之（東海大学）